

# 心鏡 新約詩篇

- *Complete Poetic Scores of Shinkyo* -

2025

Op.1

# 交響詩 第0番 「祈り」

---

時の奴隷

毛虫を運ぶ 蟻の列

時の土鈴

揺れて零れる 地の隙間

## Op.2

## 葬送行進曲 第1番 「夢想」

人びとの 体を運ぶ あの電車  
目的地 エスカレーター 並ぶ列  
片側を空けて待つか 急いでゆくか  
踏切の下がる鐘の音 忙しく響き

魂の運ばれ下ろされ 揺れる籠  
最終点 自動の階段 見えぬ天  
片側で忙しく運ばれ 消えゆく命  
鐘の音の告げる到来 鉄の棺桶

## Op.3

# 葬送曲 第1番 「鎮魂」

---

踏切の 機械の鳴らす鐘の音  
赤染みつけて 横切る電車

遙か西 機械の響かす滝の音  
気体と化して 火花の無数

## Op.4

# 夜想曲 第1番 「欺瞞」

---

夜の薄絹

街の灯り

隠された影

夜の綴帳

目蓋の裏

明日 欺瞞

## Op.5

# 交響詩 第1番 「街」

---

信号の 代わる代わるに 赤緑  
車人の映す 跡十字

つつじ落ち 代わる代わるに 緑赤  
花待ち廻す 時の齒車

## Op.6

## 前奏曲 第1番 「希望」

梅雨空に 昼夕夜と まだら模様  
混じって垂れて 虹の筆水

夜の木に 数多の蝙蝠 白い奇声  
互いに掻き消す 身体の在りか

さす傘に 落ちて弾けて 雨の粒  
つながり落ちて 鳴る雨音

## Op.7

## 交響詩 第2番 「灯り」

日の灯り 線路のつなぎ目 浮かばせて  
身体を求める ふた腕代わり

蛍光灯 線路のつなぎ目 こだまして  
日除けの向こう 街の幻

前照灯 線路のつなぎ目 可視化して  
動かぬ景色 街の逆行



## Op.8

# 葬送行進曲 第2番 「紫陽花」

---

白の視線

薄まる生氣

紫陽の花

薄銅の薄衣

仮初の装束

燃える沈黙

黒の溜まり水

輪郭の揺らぎ

残された片割れ

## Op.9

# 交響詩 第3番 「犍陀多（カンダ タ）」

---

犍陀多の チリトリ掬う大ムカデ  
秩序の世界 居場所なく

大岩で 頭と足を匿って  
カラダと同色 赤と黄も

切れた数珠 カラダの糸の伸び縮み  
昼間の色々 在る証明

切れた数珠 カラダの糸の伸び縮み  
夜間の面々 闇の一族

灰色の硬い布団にムカデのカラダ  
潰れて飛び出る 無垢の液

犍陀多の イノチ救う大ムカデ  
秩序の世界 切れた数珠糸

## Op.10

# 前奏曲第2番 「ふた模様」

---

梅の雨 黒い薄布 照れ隠し  
溜まる地の熱 上気 ふた頬

梅の雨 白い油膜 濡れ弾け  
二度跳ね揚がる 冷めたテンブラ

## Op.11

## 幻想曲 第1番 「白日と月光」

真夏の白日  
無慈悲な裁き手  
忌み嫌う曖昧  
至上のリアリズム

灰色のアスファルト  
揺らぐ無像の蜃気楼  
行き交う細長い人影  
代わる代わるに舞台袖

真夏の月光  
慈悲深き許し手  
太陽の冷静な片思い  
受け止め返す古鏡

漆黒のアスファルト  
敷かれる黒の薄絨毯  
足音たちの多重奏  
順に脱がれる舞踏靴

白日と月光の叶わぬ恋  
仲取り持たぬ天の川  
粉々に碎けるラムネ瓶  
ダンプの下ろす砂利の音

## Op.12

## 変奏曲 第1番 「再生」

艶もなく館に集う娼婦たち  
時間を売って 生き永らえる

黒い蛾の地面に落ちて黒こより  
風に吹かれて 濡れ落ち葉

電車の窓に映る顔  
生気のない両の瞳

電車の窓に映る顔  
白くて黒い両の頬

窓枠の中の動かぬ像  
ただ見られるだけの遺影

遺影に光る街々の影  
ただ流れるだけの走馬灯

街灯の黒い蛾誘う似非の月  
ふた羽に浮かぶ 真夏の枯葉

夜の天に穴開き滴る黄の光  
舌で味わう 生命の口淫



## Op.13

## 交響詩 第4番 「川面」

音もなく 水面きらめく 黒い川  
愛求め さすらう螢 点々と  
愛を受け 女の瞳 白く濡れ

音もなく 水底見せる みどり川  
水求め しおれる草木 鬱蒼と  
水枯れて 女の睫毛 黒く濡れ

## Op.14

## 前奏曲 第3番 「風」

風を知らせて 蟬の転生  
地下で紡いで 愛の調べ  
途惑う乙女 その愛撫にも似て  
真夏に溶けて 歪んだ輪郭

風を知らせて 雲のゆくえ  
頭上を巡って 礼拝堂の天井画  
微笑む聖女 その醒睡にも似て  
地上に堕ちて 愛の歌い手

風を知らせて 葉々の揺れ  
木の枝つかんで 最初の抜け殻  
嘲ける悪女 その屈折にも似て  
野良猫さらって 最期の抜け殻

## Op.15

## 変奏曲 第2番 「土壌」

赤紫の花の咲く  
白い柵の向こうの庭園  
恵みの放水 日課の水浴び  
試練の脱衣 日課の日浴び

赤紫の花の咲く  
灰色のアスファルトの裂け目  
恵みの放水 水のお零れ  
試練の脱衣 影の正夢

黄緑色の草生える  
灰色のアスファルトの裂け目  
恵みの放水 届かぬ水滴  
試練の脱衣 靴裏の影

## Op.16

## 夜想曲 第2番 「ひととせの夢」

いつか見た夢

春の陽射しの水に溶け

耳に流れる生命の胎動

いつか見た夢

夏の夜空の打ち上げ花火

耳にこだます戦火の空砲

いつか見た夢

秋の銀杏の匂う敷き毛布

耳に笛吹く先取りの乾風

いつか見た夢

冬の夜明けの白い月

耳に聞こえる貝殻の記憶

## Op.17

# 幻想曲 第2番 「夏の光」

---

夏の曙光の橙に  
染まる光の陰黒く  
人みな隠す自身の幻影

夏の白光の輪郭に  
生まれる光の陰厚く  
人みな愛すガラスの縁塩

夏の夜光の灰色に  
埋める光の闇暗く  
人みな求む街灯の蜘蛛

## Op.18

# 幻想曲 第3番 「屈折」

---

幾万年の時を越え  
幾億年の時を越え  
永遠の刹那の連鎖  
有限の光の軌跡

星疎らに街の夜空  
濁りの向こうの夢  
写真に宿って点の今  
映像の記して点の今

無数の銀の鉄屑  
天蓋を擦る銀の鉄屑  
流れのない銀の河  
発光体の集合体

## Op.19

# 交響詩 第5番 「こよみ」

---

朝の風 軽さ感じて 古こよみ  
雲の被せて 薄陰の日傘

昼の壁 厚さ感じて 新こよみ  
蒼天浸して 氷と練乳

夜の風 柔さ感じて 古こよみ  
月のみ照って 先取る夜空

Op.20

# 変奏曲 第3番 「遡行」

---

灰色の雲の向こう

冷たく燃える夏の黄色

冷やされ滲む夏の青色

破れて漏れる夏の藍色

弾けて溜まる夏の黒色

灰色の雲の向こう

燃えて灼ける風の海



照らし震える風の海

灰色の雲の向こう

どこまでも輝く太陽

どこまでも輝き弾く月

## Op.21

# 遁走曲（小フーガ）

---

小高い山の 霊の園  
並び立つ 桜の老木

あの  
路上に転がる セミの黙身

陽光宿す 墓石の標本  
安置される 無数の舍利

あの  
路上で動かぬ ミミズの変色

ゆらりゆらめく 線の香り  
ゆらりゆらめく 菊の花

あの

路上に墮ちる ミツバチの使命

小高い山の 霊の園

並び立つ 緑の老兵

あれら

土に還れぬ 些細な抜け殻

陽光宿す 墓石の敬礼

放置される 歴戦の舍利

あれら

土に還らぬ 冷めた舍利壺

花散って 進む季節

黒いレースに 透ける夏

## Op.22

## 前奏曲 第4番 「過ぎゆく夏」

残る暑さの鼻息荒く  
剥き出しの光の棘

残る暑さにセミ鳴き止んで  
取り返される夏の風音

白黒まだらのクジラ  
海面滑って風の波

乾いた鐘の音 踏切に  
右に 左に 流れ 消え

寝坊のセミの慌てて鳴いて  
時間のずれ 季節の名残り

逆さの海に重なる薄黄色  
古いアルバム 褪せた写真

## Op.23

## 夜想行進曲 第1番 「黒い散歩者」

夜の藍に潰される薄紫  
夜の雲に遮られる夏の星

等間隔に 街の灯り 灯り

路上を這う黒い散歩者  
薄明かりから 薄明かり  
薄明かりから 薄明かり

エントランスの明るい電灯  
ドローンの昆虫 天井へ 天井へ

無意識に 蹴り出される脚 脚

光の中へ 光の中へ

## 黒い散歩者と　しばしの別れ

## Op.24

## 幻想夜曲 第1番 「雲丹」

まるいのに まるくない  
暗くて黒い 海の底

赤に 青に 黄に 白に  
明滅する雲丹の そこかしこ

ぬるい水  
冷たく光る雲丹の棘

冷えた水  
暖かに光る雲丹の棘

まるいのに まるくない  
暗くて黒い 海の底

前に 左に 後に 右に



もがく肢体の　そこかしこ

ぬるい水

冷たく光る雲丹の棘

冷えた水

暖かに光る雲丹の棘

まるくないのに　まあるい

暗くて　黒い海の向こう

赤に　青に　黄に　白に

明滅する雲丹の　そこかしこ

冷たそうな水

冷たそうに光る雲丹の棘

まるくないのに　まあるい

明るくて　白い海の中

赤に 青に 黄に 白に  
明滅する雲丹の 夢と消え

## Op.25

## 無音歌 第1番 「信徒」

動かぬ影に沈む夜の公園

曲がりくねった背々中で  
左右に広げた両の腕々を支え  
その格好でお前たちは止まっている

時を忘れたかの夜の公園

曲がりくねった背々中で  
左右に広げた両の腕々を支え  
その格好でお前たちは固まっている

灰色の雲に隠れた夜の庭園

曲がりくねった背々中で  
左右に広げた両の腕々を支え  
その格好でお前たちは待ち続ける

灰色の雲に透ける夜の庭園

曲がりくねった背々中で  
左右に広げた両の腕々を支え  
その格好でお前たちは祈り続ける

月と星々の奏でる音のない共演

## Op.26

## 夜想行進曲 第2番 「再会」

夕空に黒く共鳴するうなり  
やがて黄紫に閃光垂れ落ちる

電車に揺られ画のない夢  
一日という舞台からの退場

黒く塗り潰された地面  
湿って粘る雨の靴裏

ひしゃげた黒い銀杏の葉  
垂れ落とす世界の事実

耳の中 眠気を覚ます

黒鍵 黒鍵 黒鍵

頭の中 紛れて消える

黒鍵 黒鍵 黒鍵

おとなしい歌劇の楽団  
どこか近くの 秋の虫たち

黒い影に 影呼び戻す

白鍵 白鍵 白鍵

黒い地面に 影引き出す

白鍵 白鍵 白鍵

足元でくり返されてきた  
つかの間の再会 その旋律

## Op.27

# 変奏序曲 「夏から秋へ」

---

耳横を通り過ぎる乾いた風

夜通し奏でる秋虫の羽  
目醒めた朝日に溶ける余韻

耳横を通り過ぎる生ぬるい風

暑さのみ残った夏の正夢  
最期までたぎらせるセミの熱情

耳横を通り過ぎる冷めた風

路上に潰れた身重のカマキリ  
世界に触れぬままの生命の米粒

耳横を通り過ぎる乾いた風

草葉の揺れて夜のざわめき  
油の切れた換気扇の音



## Op.28

# 夜想四重奏曲 「秋雨」

---

頭上の傘に秋の雨粒

水底透ける名ばかりの川  
水かさ増して あふれる真実

頭上の傘に秋の雨粒

地の下流れる隠密の川  
水かさ増して 流れる轟音

頭上の傘に秋の雨粒

アスファルトに生きた花  
褪せた花びら 滲む水彩の赤

頭上の傘に秋の雨粒

濡れ垂れ下がる銀杏の葉々  
路上との接吻 急かされる悲恋

頭上の傘に秋の雨粒

古の賢者の箴言  
「万物の根源は水である」

## Op.29

# 随想曲 第1番 「墓地」

---

住宅街の墓の街

家々の墓銘 歴史の題名

家々の墓標 歴史の血脈

住宅街の墓の家

伸びた雑草 風に揺れ

古い卒塔婆 風に揺れ

住宅街の墓の上

白日の残像 赤く冷え

耳中の記憶 ツクツクボウシ

住宅街の墓の外

疎らな足音 隣の静けさ  
車両の通行 流れる精霊

Op.30

# 月光ソナタ

---

仮眠 仮死 意識

音もなく上がる仮の幕

瞳の刷る版画

いつもの帰路の電車内

横に滑る連結車両の音

下に墮ちる連結雨粒の音

異なる和音

交差と衝突の対位

温白色に反射す

やわらかな月の光

底に近づく急襲の雨  
ほとんどからの 瓶のくち  
ぼとり ぼとりと墮ちる余韻

そこかしこの水たまり  
表面に波紋  
幾重にも 広がり 消え  
表面に波紋  
幾重にも 広がり 消え

温白色に反射す  
やさしい月の光

黒く濡れたアスファルト  
油の弾く水  
街の灯りの混合色  
油の弾く水  
街の灯りの混合色

厚みの増した暗い川  
街灯の色彩  
浮かんで 歪み  
街灯の色彩  
浮かんで 歪み

温白色に反射す  
影を生む月の光

## Op.31

## 雨のエチュード

傘に着地する音で雨を知る

ばらり ばらりと 断絶の音  
ばらり ばらりと 規則的な音

唇に触れる冷たさで雨を知る

ぼわん ぼわんと 小さな口づけ  
ぼわん ぼわんと 真水の純味

湿気に満ちた草葉の匂いで雨を知る

ふあん ふあん と くすぐる鼻先  
ふあん ふあん と 異質の香水

ヘッドライトの灯りで雨を知る



つつ　　つつと　　無数の爪痕  
つつ　　つつと　　無数の流星

## Op.32

# 「不可視」のフーガ

---

身体にからむ 厚手の夜風

前から 後へ 右から 左へ

身体にからむ 厚手の夜風

後から 前へ 左から 右へ

「後のみ悔いる 自らへの慰め」

耳元で響く 鈴の音

前で 後で 右で 左で

耳元で響く 鈴の音

後で 前で 左で 右で

「螺旋を進む 時計の秒針」

信号機くぐる車 車

前へ 後へ 右へ 左へ

信号機くぐる車 車

後へ 前へ 左へ 右へ

「人生に透ける標識 一方通行」

「自由と誤魔化す 方向音痴」

## Op.33

# 幻想的ソナタ 第1番

---

黒雲透かして細いひび  
橙漏れて 橙と黒の明滅

田舎町の黒い一本道

等間隔の揺れない蠟燭

左右交互に靴裏の音  
代わる代わるに光と闇と

緑にやつす桜の樹々  
闇に憑かれて 風を待つ

あの桜 あのときの桜  
悲喜交々 記憶の花びら

黒雲透かして細いひび  
橙漏れて 橙と黒の明滅

田舎町の黒い一本道

等間隔の揺れない蠟燭

左右交互に靴裏の音  
代わる代わるに光と闇と

鳴き声だけのツクツクボウシ  
光畏れて 日暮れ待つ

あの陽光 あのときの陽光  
悲喜交々 記憶の照明

黒雲透かして細いひび  
橙漏れて 橙と黒の明滅

田舎町の黒い一本道

等間隔の揺れない蠟燭

左右交互に靴裏の音  
代わる代わるに光と闇と

地面を埋める銀杏の枯葉  
紅葉を見上げて 気分の高揚

あの赤黄 あの強烈な臭気  
悲喜交々 鮮明と褪色

黒雲透かして細いひび  
橙漏れて 橙と黒の明滅

田舎町の黒い一本道

等間隔の揺れない蠟燭

左右交互に靴裏の音  
代わる代わるに光と闇と

分離する 光の粒子 粒子  
具象する 白い真綿 真綿

あの白さ あの片栗の靴音  
悲喜交々 白無垢の泥汚れ

黒雲透かして細いひび  
橙漏れて 橙と黒の明滅

田舎町の黒い一本道

等間隔の揺れない蠟燭

左右交互に靴裏の音  
代わる代わるに光と闇と

凱歌か 沈黙か

## Op.34

# 幻想的ソナタ 第2番

---

更新 更新 更新  
デジタル 時計の数字

無音 無音 無音  
時の足踏み

無意識  
真っ直ぐな道  
上のカギ括弧

無意識  
真っ直ぐな道  
下のカギ括弧

グレイー色  
チェスの盤面



戸惑うナイト  
素知らぬ他の駒々

行進 行進 行進  
それぞれの足音

直進 直進 直進  
それぞれの目的地

無意識  
真っ直ぐ  
左折

無意識  
真っ直ぐ  
右折

目に映る景色  
ポスターの写真

カバンに詰めた感情  
開演前の劇中衣装

歩進 歩進 歩進  
機械式 時計の秒針

刻音 刻音 刻音  
時の前進

頭上に空いた穴  
降り注ぐ光の鋭利

頭上に空いた穴  
溶け漏れる光の蓄熱

跡の残らぬ穴の軌道  
大きく緩やかな半円

地平から昇り  
地平へと沈んでゆく

疲労 疲労 疲労  
終幕の役者の狭い歩幅

軽快 軽快 軽快  
我が家という名の控室

頭上に空いた穴  
鎮められた間接照明

頭上に空いた穴 穴  
季節ごとに変わる演目

跡もなく呑み込まれる穴  
完璧なフェイドアウト

跡もなく埋め隠される穴  
完璧なバトントス

時の流れ 二卵性

## Op.35

## 幻想的ソナタ 第3番

今夜も見えぬ あの夜の月

眠る街 光の点灯 冷えた沈黙

順に 横へ 横へ

青 黄 赤 青 黄 赤

トリコロール スライドループ

いつ来るか わからぬ車

いつ生まれるか 分からぬ意義

いつ いつでも 瞬間 瞬間

眠らぬ街 光の明滅 醒めた許容

順に 上へ 下へ  
青 点滅 赤 青 点滅 赤

ツートーン アップアンドダウン

斜めに細長く 人影多少 黒と黒  
横断歩道の平行線 白と黒のイコールノット

昼夜を問わず 今 そして今

眠たい線路 警笛の点灯 寝る支度

忙しなく 上へ 下へ  
赤 赤 赤 赤 赤 赤 赤 赤 赤

ユニカラー フラッシュ フラッシュ

最終電車 遠ざかる裏の顔  
ようやく消灯 立って眠る真の夜

始発のアラーム 鳴るまでの 無画の夢

橙の冷たい陽光

目の中で ちらつく青アザ

方向違いの冷たい陽光

身体につけた不可視の青アザ

Shining and Shining

## Op.36

# 時と光のフーガ

---

宇宙の中心 太陽

その周囲を地球は回る

地球も自ら回り続ける

時を知らせる 三針

盤面の数字を順になぞる

同じ律動でなぞり続ける

まだ朝と知らせる 街灯

白み始めた空に重なる光

ただ灯っているだけの光

蒼天に霞む白い月

熱のない尖った太陽

煉獄の炎に灼ける太陽

鍛えられ水に冷める太陽

黄色に映える白い月

もう夜と知らせる 街灯

まだ明るい空に重なる光

ただ灯っているだけの光



時を知らせる 三針

盤面の数字を順になぞる

同じ律動でなぞり続ける

宇宙の中心 太陽

その周囲を地球は回る

地球も自ら回り続ける

時を知らせる 三針

盤面の数字を

## Op.37

## 無音歌 第2番 「真我」

あの太陽が 太陽であるゆえん  
その光にか その熱にか あるいは

この月が 月であるゆえん  
その照りにか その蝕みにか あるいは

長く伸びた雑草の上  
あの蜻蛉 この蜻蛉  
宙を跳ね 跳ね 周る

「あの」もなく  
「この」もなく  
蜻蛉  
透明の蜻蛉  
乾空に漂い 漂い  
流れ 流れる

太陽が

太陽であるゆえん  
光にか  
熱にか  
あるいは

月が  
月であるゆえん  
照りにか  
蝕みにか  
あるいは

夏の緑葉 宿る色艶  
秋の黄葉 乾いた輪郭  
枝から離れ ひと息に 落ちる

「あの」もなく  
「この」もなく  
枯葉  
色褪せた緑葉  
乾風を祈り  
待ち  
樹の根  
焦がれる

太陽が  
太陽であるゆえん  
名前にも  
活動にも  
いずれにも

月が  
月であるゆえん  
容姿にも  
環境にも  
いずれにも

終着駅 到着の電車  
開くドア 次々に 脚 脚  
窓々の影 横々に 背中 背中

「あのひと」 「このひと」  
丸い集団 点々の円陣  
そこかしこ 解けて 組まれ

自分が自分である所以  
何に 何で いったいどこに

自分が自分である所以  
何にも 何でも おそらくどこにも

自分に疲れ 自分で疲れ  
頭上を見上げ 空への逃避

「あの」もなく  
「この」もなく  
空の向こう  
あちこちで  
きっと星は  
ひたすら輝いている

## Op.38

# 無音歌 第3番 「生命」

---

昨日

「人身事故が発生しました」

自ら散らした生命

電車のダイヤの乱れ

灰色の雲の連なり

隙間に滲む茜色の朝やけ

電車が揺れて

身体が揺れて

目蓋を閉じて

意識を任せて

灰色の雲の連なり

隙間に覗く乳色の陽光

ホームに入る電車  
身体に囁く線路の怨念

この美しき罪夢  
この身震いの高揚

只今  
「人身事故が発生しました」

また自ら散らした生命  
止まる電車 ただの鉄箱

灰色の雲の連なり  
隙間に覗く茜色の夕やけ

ホームに入る電車  
白い車体に茜色の悲劇

座るシートの冷たさ  
事実という透明の悲劇

灰色の雲の連なり  
隙間に覗く乳色の月光

血の記憶を浄化せよ  
焦りの鼓動を鎮ませよ

身体に残る電車の振動  
線路の継ぎ目 継ぎ目のリレー

自ら散らす生命

さだめに散る生命

いつか見る

生命の抜けた  
あのひとの亡骸



## Op.39

## 軌跡の三重奏曲

特急列車 窓の向こう  
灰色の防音壁  
黒い横縞 線の錯覚  
街の家々 孕む曇天の色

始めも 終わりもない 紙芝居

川 流れ 流れて  
濁った川面 忍ぶ底  
描き 消し 描き  
濡れた画布 流紋の無数

再開も 休止もない 川音の鼓動

風 吹き 吹いて  
冷える樹木 萎む色艶  
吸気の臭気 銀杏の臭気  
足裏の粘り 潰れた団栗

喜びも 哀しみもない 風の感触

特急列車 高架の揺れ音  
髪乱す風 無言の囁き

黒い川 夜との抱擁  
風の音 軽い吐息

青い川 流れぬふり  
特急列車 鏡映しの横滑り

人生の記憶

秒針の軌跡

現在進行形

## Op.40

## 無音歌 第4番 「振り子」

明るい夜 意識の朝  
いち枚重ね着 透ける皮膜  
頭上の街灯 黄色 諦め

明るい朝 視界の朝  
いち枚重ね着 分厚き目蓋  
電車の振動 意識 断絶

夕焼けの朝 茜色  
後退の夜 気配 足音

昼 正午 白き輝き  
極めた頂き 絶対 孤高

朝焼けの夕方 茜色  
前進の夜 足音 気配

暗い夜 視界の夜  
いち枚重ね着 透ける皮膜  
頭上の街灯 黄色 脱皮

明るい夜 意識の夜  
いち枚めくれ 露わなる真皮  
横たえる身体 意識 断絶

## Op.41

## 無音歌 第5番「光年」

もう 何度目の 朝  
晩秋の 薄暗い朝  
夜の強引な 後押し  
この 背越しの 寒風

いま 何度目かの 朝  
晩秋の 虚ろな 朝  
破れ 覗いた 青い空  
街々の 気急ぐ 夢うつつ

数え歌も流れぬ朝  
晩秋の 冷え 鈍る朝  
溶け漏れる 橙の光  
橙の 冷たい溶岩

終わる序奏  
白い陽光  
光年の隔たり

積み重ねられてゆく  
記憶の楼閣 やわい床  
下階に被さる 黒絹の霞

もう 何度目の 夜  
晩秋の 真暗な夜  
昼の自然な 後退 交代  
この 顔なぞる 寒風

いま 何度目かの 夜  
晩秋の 明鮮な 夜  
隠れ 覗いた 夜半の月  
街々の 穏やかに 夢うつつ

数え歌も不要な夜  
晩秋の 冷え 固まる夜  
透け零れる 白い光  
白い 街灯の星々

月めくりのカレンダー  
あと数枚 透け見える壁

時の流れの早さ  
腕元の秒針の律動

陽光の 宿す影  
月光の 宿す影

差し延べる 細長い手の影  
すり抜け 落ちる 光年の記憶

## Op.42

## 綴織のフーガ

地熱に冷えた 風

見上げる空 青い暗幕  
地平の際 茜の縁取り  
街の街灯 薄まる影

走る電車に撥ねる 風

車窓の向こう 茜の開幕  
醒めた舞台 尖光の花束  
反射の拒絶 終幕の目蓋

始陽も孕まぬ 風

吸い込む大河 水底の底  
常緑の葉々 飛沫の玉粒  
顔での破裂 身の震い



頂陽も挫けぬ 風

壁の厚み 灰色の盾  
醒めた世界 尖痛の矛  
心象の麻痺 解毒の点滴

終陽そのものの 風

葉々の隙間 流れる滝  
胸中のざわめき 影呑む光  
重たい足取り 影呑む闇

煌々と照る月 隠さぬ蒼斑

## Op.43-1

## 交響詩 第6番「地上のアイデア」

変わらない 平日の帰路

秋 涼しく 肌寒い風  
涼しさ 消えかかる太陽  
肌寒さ 冷めてゆく地表  
上着の下 毛穴の痺れ

繰り返すだけの 日々の務め

秋 涼しく 寒い風  
涼しさ 現われ隠れる月  
肌寒さ 冷めきった地表  
上着の下 怯える動悸

あと寝るだけの いち日の終わり

冬 寒く 冷たい風音

寒さ 秋風の断層  
冷たさ 秋風の予告  
照らす月 輝くオリオン

また朝 いつもと同じ目覚まし

冬 寒く 冷たい風  
寒さ 秋風の更新  
冷たさ 真冬の到来  
陰る月光 透ける夜空

同じ駅 同じ時間 同じ電車

春 冷たく 温い風  
冷たさ 冬の名残り  
温さ 雪解けの光  
照らす夜桜 透ける花脈

同じ仕事 同じ開始 同じ終了

春 冷たく 温い風  
冷たさ 桜の木陰

温さ 葉桜の木漏れ日  
照らす新緑 生命の輝き

ただ寝るだけの つかの間の休日

夏 鈍く 厚い風音  
鈍さ 春風の蓄熱  
厚さ 幾重ものの衝突  
目蓋の裏 赤い網目

退屈も凌げぬ つまらぬ時間

夏 鈍く 厚い風音  
鈍さ 春風の膨張  
厚さ 消されぬ肌の記憶  
眼前の眩さ 青い星々

地上のアイデア 慣性の類列

## Op.43-2

## 交響詩 第6番「天上のアイデア」

透け見える 星々の棲家

秋 涼しく 肌寒い風  
涼しさ 聖堂の空調  
肌寒さ 他者の不在  
微昇の体温 自前の温もり

透ける天井 塗り潰す油彩

秋 涼しく 寒い風  
涼しさ 隠匿された月  
肌寒さ 埋隠された星  
微降の体温 肌のさざ波

透明な黒い天井 沈黙の聖堂

冬 寒く 冷たい風音

寒さ 聖堂の隙間風  
冷たさ 足音の独奏  
照らす月 告発の運命

地表の回転 不動の中心

冬 寒く 冷たい風  
寒さ 聖堂の壁の消失  
冷たさ 柱と柱の谷間風  
陰る月光 闇色の外套

天井の向こう 昇る太陽

春 冷たく 温い風  
冷たさ 聖堂の柱  
温さ 柱を引き上げる陽光  
散りゆく桜 消えゆく砂絵

天井の向こう 沈む太陽

春 温く 冷たい風  
温さ 聖堂の柱の輝き

つめたさ 萎む柱の輝き  
深緑の葉桜 地表に落とす影

天井の向こう 頂点の白日

夏 鈍く 厚い風音  
鈍さ 地表の過熱  
厚さ 熱と光の十二単  
目蓋の際 流れる塩気

天井の向こう 反比例の距離

夏 厚く 鈍い風音  
厚さ 聖堂との隔たり  
鈍さ 忘却の信仰心  
眼前の眩さ 神の威光

天上のアイデア 自分のない世界

## Op.44

## 幻想的ソナタ 第4番「永遠の夜」

閉じられてゆく 天蓋  
仕舞われてゆく 夜空

溶け広がる 水平線の橙  
濁った藍色 天蓋の裏地  
横長の雲 灰色の 横長の雲

閉じられた 天蓋  
仕舞われた 夜空

冷え固まる 水平線の橙  
丸まった黄玉 照射の始動  
横長の雲 薄灰色の 横長の雲

継ぎ目のない 天蓋  
映し出された 朝空

白球の輝き 光と熱の分離  
揺れる木陰 忙しない交差の人影  
横長の雲 白灰斑の 横長の雲



無機質の建屋

無数のビル群

壊れた電子レンジ

設定時間 解放の瞬間

左右に割れる 天蓋

映し出された 夕空

切れかかる白球 光と熱の後退

佇む木陰 忙しない交差の光 光

横長の雲 白灰斑の 横長の雲

開けられてゆく 天蓋

戻されてゆく 夜空

冷え固まる 頭上の橙

丸まった黄玉 蒼玉の始動

横長の雲 薄灰色の 横長の雲

開けられた 天蓋

また現われた 夜空

隠された月 疎らな星粒  
濁った藍色 天蓋の裏地  
横長の雲 濃灰色の 横長の雲

天蓋の向こう 永遠の夜

永遠の夜 神聖の法則

Op.45-1

## 4つの即興曲

---

昇る朝陽  
夜明けの閉幕

乳色の薄幕  
醒めた舞台

漂流する銀粉  
左傾する隊列の鳥

底の見えぬ青空  
くすむ上澄み

漂流する銀粉  
右傾する隊列の鳥

頬撫でる  
薄幕の生地

鼓膜震わす  
寒風の音

入っては

消えゆく

入っては

消えゆく

人 人 人

乳色の薄幕  
固有の神隠し

沈む夕陽  
醒める熱演

黒い銀幕  
赫い月

下地の乳色  
透け見える黄泉

今への前進

過去への前進

## Op.45-2

# 4つの即興曲

---

つかの間の眠り 帰路の眠り

北風寒く また時間の内へ

足元の枯葉 現実の音触

古の眠り 情念の眠り

月明かり 街の街灯

自らの影 その源を知らず

つかの間の眠り 自我の眠り

夜空の夢 瞬かぬ星々

起床の音 脳との格闘

夜空の眠り 街々の眠り

月明かり 街の街灯

自らの影 朝も夜も知らず

## Op.45-3

# 4つの即興曲

---

かつて見た夢  
起きて見た夢

流れる川  
跳ねる飛沫  
煌めく水面

流れる雲  
隠れる太陽  
光射す地表

忘れられた夢  
寝て見る たまの夢

川の遠景  
震える寒天  
濁りの表面



重たい曇天  
隠された太陽  
靴裏の冷たさ

詩人の見る夢  
起きてみる たまの夢

## Op.45-4

# 4つの即興曲

---

昇る朝陽  
夜明けの閉幕

夜から夜へ  
肉体の独り歩き

西の空 輝く月  
東の空 茜の待機

地面の波間  
呼び醒ます影

詩人の寢床  
主体の交代

自らの影  
朝も夜も知らず

乳色の朝靄  
社会の現実

片や眺める 乳色の朝靄  
片や囁く 乳色の薄暮

詩人の微睡み  
美しき寝言

つかの間の眠り 帰路の眠り

北風寒く また時間の内へ

足元の枯葉 現実の音触

底のない漆黒の夜空  
果てしなき夜空の向こう

輝き震える 白銀の月  
神々しい 浄化の槍

詩人の夢

眼前の 完全なる光

地面の波間

呼び起こす光

詩人の起床

主体の交代

自らの影

夜道に紛れ

自らの影

その源を知り

## Op.46-1

## 6つのバガテル

目蓋の裏の乳白色  
背中で感じる暖かさ

四季でもなく  
移ろうでもなく

過去でもなく  
未来でもなく

立ち止まることもなく  
刹那に消える 今 今 今

目蓋の裏の濃藍色  
顔肌に感じる冷やかかさ

夜でもなく  
更ける環境

夜空でもなく  
陰でもなく

余韻を残すこともなく

刹那に切り替わる 今 今 今

目蓋の裏の乳白色  
背中を感じる暖かさ

四季でもなく  
移ろうでもなく

過去結構でもなく  
未来でもなく

立ち止まることもなく  
刹那に消える 今 今 今

目蓋の裏の濃藍色  
顔肌に感じる冷やかさ

夜でもなく  
更けるでもなく

夜空でもなく  
陰結構でもなく

余韻を残すこともなく  
刹那に切り替わる 今 今 今

目蓋の裏の乳白色

背中で感じる暖かさ

夢と現の隙間

眠気を誘う 線路の継ぎ目

## Op.46-2

## 6つのバガテル

北の夜空の大柄杓  
撒かれた水も闇に消え

地上の夜道 明かり点々  
弾ける水滴 天の名残り

南の夜空の砂時計  
流れる砂も闇に消え

地上の夜道 明かり点々  
自らの影 ふたつ みつつ

南北の midpoint 移動 不動  
詩人の言葉 還らぬ筈

北の夜空の大柄杓  
撒かれた水も朝に消え



南の夜空の砂時計  
流れる砂も朝に消え